

童の特徴を「特異な才能ある子供」「学力の低い傾向が見られる子供」「不登校傾向」などに分類し、それらの合計が22.7人にも達すると述べています。つまりは、35人学級の約65%が何らかの問題を抱えている子どもだと言うことです。同じく中学校も26.9人に達し、その比率は67.25%になっています。

こうした状況から、文部科学省は学校教育における「児童生徒の多様性を包摂する必要性」を認識し、一人ひとりの学習への意欲を高め、その可能性を開花させる教育の実現を重要な課題として掲げています。もはやクラスの半分以上の児童生徒が昔のような教師主導の画一的な教育では対応できない状況にあり、その人数や割合も増える一方です。

文部科学省が公表した令和5(2023)年度における小中学校の不登校児の数は、346,482人(前年度299,048人)です。この増加傾向は11年連続です。同じく、2024(令和6)年度の小中学校における「いじめ」の認知件数も732,568件(前年度681,948件)となり、こちらも3年連続で増加しています。こうした数字を見るにつけ、「日本の学校教育は大丈夫だろうか」と思う人は相当数に達するのではないのでしょうか。子どもを持つ親や学校の先生たちの危機感は、「半端ない」に違いないと思われます。

さて、本書は子どもたちが直面する「学び」の危機の実態を考えつつ、日本の学校教育のあり方を再検討します。特に、2000年以降に顕著になった「学力低下」と「学力の二極化」の問題を取り上げ、こうした危機を乗り越える新たな「学び」のあり方を考察します。では、こうした危機的状況はどのように対処したらいいのでしょうか。本書の提言は二つあります。

一つは、学校教育での「**テストを削減するか、廃止する**」ことです。「テストに依存する学校教育」、「テスト漬けの学校教育」のあり方を改め、新たな学力観に立った教育のあり方を追求すべきと考えます。新たな学力とは、テストのための学力ではなく、次に提案する卒業論文作成のための学力です。

二つ目の提案は、テストの削減、もしくは廃止に代わって、「**小中学校にも卒業論文の導入**」を提案します。もちろん、「卒業論文」といっても小学生に「論文」が書けるはずありません。本書が提案する「卒業論文」とは、「卒業課題」「卒業レポート」「卒業制作」といった類のものであり、自分の意見や主張をまとめた「エッセイ」「作文」「宣言文」のようなものでもいいと思います。自分で課題を考え、色々と調べ、自分の言葉でまとめることを重視します。そして、小学校で開始した卒業論文作成を中学校、高校、大学へとつなげ、発展・深化させることを目指したいと思います。

どうして、このような提案をするかと言うと、それは「危機に立つ学校教育」の状況を救う一つの方策となりうるからであり、未来に向けた新たな学力観の確立となるからです。日本の学校教育に対する世界的評価は「高い」と言えます。日本の児童生徒の学力は、均質で高いレベルの基礎学力を持っています。学校の教員も全員が教員免許を持ち、生徒指導に対する意欲と熱意に溢れています。ですが、日本の学校の教育スタイルは教師中心、教科書中心、テスト学力中心です。学校の勉強は楽しくないし、つまらない。日本の学校教育の特徴は、ドリル学習やワークブックなどに象徴されるように、基礎知識の反復や四択問題の中から「正答」を求める訓練を重視するものです。